

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年 5月25日現在

機関番号：27601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16693

研究課題名(和文)被爆と復興をめぐる文学・文化の研究 長崎を中心に

研究課題名(英文)Literary and Cultural Study of the A-bomb Attack on Nagasaki and its Recovery

研究代表者

楠田 剛士(KUSUDA, Tsuyoshi)

宮崎公立大学・人文学部・助教

研究者番号：20611677

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、被爆という出来事をどう記憶するのか、現在の状況をどう把握するか、そして未来をどう描くかという問題について、1940年代後半から50年代における、被爆地長崎の文学表現や文化運動を取り上げて検討するものである。1. 地元で発行されたサークル誌・文芸誌の資料調査や、当事者への聞き取り調査を踏まえて、市民や労働者による文化運動の実態を明らかにした。2. 被爆の記憶や現在の復興に関して、表現の定型化と逸脱がせめぎあう様を明らかにした。3. サークル同士の交流を通じて平和・原爆問題に対する批判や新しい平和運動が生まれたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study examines literary works and cultural movements arising in Nagasaki from the latter half of the 1940s to the 1950s, with a focus on the manner in which the attack came to be remembered, how the current situation is understood, and how the future of the city is depicted. The study adopts a three-pronged approach: (1) Examination of the cultural movements of citizens and workers in Nagasaki based on circle publications and literary journals as well as interviews of those who took part in those movements; (2) Analysis of the typical as well as the untypical means of expression for remembering the A-bomb attack and envisaging the city's recovery; (3) Examination of the roles of cultural movement networks in raising a critique of peace movement and the issue of the A-bomb as well as in creating a new peace movement.

研究分野：日本文学

キーワード：原爆文学 長崎 復興 戦後文化運動

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 原爆文学・文化運動の再評価・再検討  
原爆投下後 70 年以上が経過し、被爆当事者の肉声が決定的に失われていく状況がある。また 2011 年に東北地方太平洋沖地震による福島第一原子力発電所の事故が起きた。こうした中で過去の原爆言説が再検討されつつある。

1945 年の被爆直後から 50 年代の復興までの期間についても調査研究が進んでいる。地方の雑誌や機関紙は、特定の地域と読者に向けたものだが、そのローカル性が内蔵する歴史性・政治性に関心が高まっている。広島ではサークル誌の復刻などの再評価が進んでいるが、長崎の場合、十分な調査と分析が行われているとは言い難い。

### (2) 研究代表者のこれまでの研究

これまで原爆文学のテキストに内包される諸問題(被爆者の証言活動、爆心地の復元活動、外国人被爆者、原爆写真集、記録映画など)について調査・分析を行ってきた。研究を進めるなかで、文化的・社会的・政治的な出来事を集積し、編集し、文学的言説を組み立てるメディアとしての文化運動の機能に注目することとなった。

## 2. 研究の目的

本研究は、被爆地における「被爆」と「復興」の言説を検証するものである。具体的には、(1)被爆地発行の文芸誌、サークル誌、機関誌などの文学・文化メディアにおいて、被爆という出来事がどのように表象されたのか、(2)被爆からの復興という動きがどのように表象されたのか、(3)復興として語る物語化によって、被爆の記憶がどのように形成・変容されたのか、について明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1) 資料調査

長崎で発行された新聞、文芸同人誌、サークル誌、機関誌などの一次資料の調査を行った。多くは長崎県立長崎図書館に所蔵されている。ここに収蔵されていないものは関係者から直接資料を見せていただいた。多くは年月経過による傷みが見られ、現物がわずかに残る状況である。貴重な資料を活用するために、画像データまたは PDF データとして整理・保存を行った。

### (2) 聞き取り調査

上記の資料調査を進めながら、文化運動・労働運動・平和運動の当事者にコンタクトをとり、聞き取り調査を行った。活動状況、人物関係、他のサークルとの関わりなど、当時の状況を伺うことができた。対面でのインタ

ビューが難しい場合には、電子メール、手紙、電話などの方法を用いた。後日、改めて確認したいことがあった場合にも同様の方法を用いた。

### (3) 他の研究者との協力

原爆文学研究会や戦後文化運動合同研究会などに参加し、文学・文化・社会・歴史・美術などの研究者・専門家と意見交換・情報交換を行うことで、調査範囲を広げたり考察を深めたりした。

国際学会での共同発表、雑誌の特集企画、共著の出版などでも、関係者の協力を得ながら進めた。

## 4. 研究成果

### (1) 長崎における復興語りの形成

1940 年代後半～50 年代前半の地元発行の新聞、サークル誌、文芸同人誌の調査からまず考察したことは、被爆地における復興の語られ方である。

論文では、地元紙の八月九日報道では建物中心の「遅しい」復興が強調されていること、その「遅しい」復興のありようがカトリック者永井隆の言説や、北村西望が 1955 年に完成させた平和祈念像の男神イメージに結びつくこと、その復興語りや永井 北村的言説が詩歌の定型的な表現に及んでいることを明らかにした。さらに被爆や復興を批判的・両義的・多義的に描く作品を取り上げ、定型化と逸脱とがせめぎあっている様や、大文字の「復興」で見えなくなる貧困・残骸・死者への視線が含まれていることを指摘した(雑誌論文、学会発表)。

『原爆文学研究』において、長崎の被爆と復興に関する特集を企画し、自身の論文も含む 3 本を掲載することができた。その際、各論文のポイントや今後の課題について解説を行った(雑誌論文)。

### (2) 復興と労働者の関係

一次資料の調査を進めるなかで、文化運動の当事者への聞き取り調査を行った。1952 年に発足した「ながさき芽だち文学サークル」と、そのサークル誌『芽だち』については、研究代表者がこれまで調査を行い論文にまとめていたが、今回、古木泰男氏に聞き取りを行ったことから、編集会議の様子、人物関係、共産党との関わりなどについて新たな情報が得られた。

論文では、都市復興の担い手であった労働者によるサークル誌において、労働現場や日常生活のなかに原爆の生々しい記憶を見いだす作品や、復興のシンボルである平和祈念像や平和公園に複数の意味を読み込む作品があることを指摘した(図書)。

その後、古木氏から紹介いただいた山脇佳朗氏にもインタビューすることができ、お話や資料から 60 年代以降の長崎の文学表現・

運動という課題が見えてきた。

(3) 見過ごされた被爆者による表現

1955年に完成した平和祈念像は、原爆からの「復興」を示すシンボルとして報道され、創作でもしばしばそのイメージで語られた。同年夏に長崎市内で発足したのが、長崎生活をつづる会という女性のサークルである。本課題に取り組む以前から調査を進めていたが、今回改めて、会で回覧されたノート、年一回刊行された雑誌、不定期に刊行された文集などの資料を精査した。

論文では、復興しつつある長崎において忘れ去られた被爆者を発見することから会が発足したこと、それまで見放された生活を送っていた渡辺千恵子が、語られなかった生活を語るという方法と受容の場を獲得していったこと、福田須磨子が被爆体験と被爆後の生活を繰り返し書くことで新しい表現を模索していたことを論じた(雑誌論文)。

(4) 「復興」後のサークル

「復興後」の1956年に発足したサークルが、長崎ロマン・ロランの会である。このサークルは聞き取り調査から知ることができた。後に長崎の文学・平和運動に関わる有力な人物が関わっていたことが分かったが、これまでほとんど研究が行われてこなかった。当時の会員だった大塚一敏氏、岡田伊佐男氏、都野弥生氏、森草一郎氏の協力を得て、会報や関係資料が閲覧でき、会の発足、参加者、活動内容、関連するサークルについてまとめることができた(雑誌論文)。

(5) 「復興」が含む揺らぎ

「被爆」からの「復興」が語られるとき、被爆以前の街並みや暮らしがどのようなものだったのか、被爆直後の状況から現在どれほど復興が進んだのか、ということもセットで語られることに注目した。「復興」が、現在だけではなく被爆以前・被爆直後の時間と行き来しながら語られることから「揺らぎ」というキーワードを得て、地域や表現ジャンルを拡大した考察を行うことができた(雑誌論文)。

(6) 原爆文学関係の項目執筆

調査や論文発表を行うなかで、原爆文学の作家や関連事項についても情報収集・整理が進んでいった。

作家については、『西日本女性文学案内』(図書)において、「おおえひで」「後藤みな子」「林京子」「福田須磨子」の項目執筆に反映することができた。

関連事項については、『原爆を読む文化事典』(図書)において、「ひばく怪獣」事件、「折り鶴とサダコの物語」「炭鉱」「うわさ」「投下機パイロット」の項目執筆に反映することができた。特に「うわさ」では、研究成果をふまえて、復興期における原爆言

説の特徴や、長崎のサークル誌に掲載された短編を紹介できた。「炭鉱」については、戦争・差別、文化運動、産業遺産などなお考察すべき問題が多いと考え、2018年7月の原爆文学研究会にて、炭鉱と原爆に関するワークショップを企画することとした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

楠田 剛土、被爆地で生活をつづる女たち—一九五〇年代の長崎を例に、日本文学(日本文学協会) 査読有、66巻11号、2017、pp.12-22

楠田 剛土、長崎のサークルを批評する—長崎ロマン・ロランの会を例として、叙説(花書院) 査読無、3巻14号、2017、pp.20-32

楠田 剛土、『美しい夏キリシマ』と戦争の記憶、国語と教育(長崎大学国語国文学会) 査読無、41号、2016、pp.151-160

楠田 剛土、長崎原爆の復興をめぐる詩歌、原爆文学研究(原爆文学研究会) 査読無、14号、2015、pp.150-168

楠田 剛土、「長崎原爆と復興の言説」の再問題化、原爆文学研究(原爆文学研究会) 査読無、14号、2015、pp.145-149

[学会発表](計1件)

楠田 剛土、The Short-Form Poetry of Post-Atomic Nagasaki Reconstruction、AAS-in-ASIA2016、2016・6・24、同志社大学(京都市)

[図書](計3件)

川口 隆行編、楠田 剛土ほか著、青弓社、原爆を読む文化事典、2017、388頁、pp.40-44、pp.178-182、pp.321-325、pp.350-354、pp.360-364

宇野田 尚哉、川口 隆行、坂口 博ほか編、楠田 剛土ほか著、影書房、「サークルの時代」を読む 戦後文化運動研究への招待、2016、368頁、pp.149-154

狩野 啓子、谷口 絹枝、西 莊保監修、楠田 剛土ほか著、花書院、西日本女性文学案内、2016、175頁、pp.33-34、pp.62、pp.86-87、pp.127-128、pp.132

〔その他〕

ホームページ等

雑誌論文 は原爆文学研究会ウェブページで無料公開されている。

<http://www.genbunken.net/>

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

楠田 剛士 (KUSUDA Tsuyoshi)

宮崎公立大学・人文学部・助教

研究者番号：20611667